

## Ⅱ テモテ 3 章 14～17 節 「ただ聖書のみ」

1517 年 10 月 31 日にルターがヴィッテンベルクの城の教会の扉に「95 箇条の提題」を張り出しことから宗教改革が始まったと言われていています。私たちの教会の信仰の源流は宗教改革にあります。宗教改革の原理を表す標語として「信仰のみ、聖書のみ、恵みのみ」が挙げられます。今日は「聖書のみ」について考えます。

### 1. 聖書の権威（：14～15）

カトリック教会では 11 月 1 日を「諸聖人の日」としていて、殉教者や聖人と呼ばれる人々のことを覚えてミサをささげます。その日を前にしてルターが問題にしたのは、カトリックの「煉獄」という教理です。まっすぐ天国に行くことができるのは、殉教者や聖人と呼ばれる完全に聖められた人たちだけで、普通の信者は煉獄に行き、自分の内に残る罪が完全にきよめられないと天国に行くことができないと教えられていました。そこで人々は、先に召された家族や友人たちが煉獄であり苦しまずに早く天国に行けるようにと、熱心な祈りと善行を行いました。そのような信仰を逆手にとって、教会堂建築の資金集めのために、免罪符を売る者たちが現れたのです。免罪符を買うと、諸聖人の功績が他の人の罪の赦しに用いられるとされました。

それに対してルターは、人の救いは神の領域であって、教皇であれ、教会であれ、亡くなった人の救いを左右することはできない、それが聖書の教えではないかと問うたのです。教皇も教会会議も最終的な権威ではなく、教会における一切の権威は聖書の権威に服すべきなのです。それが「聖書のみ」ということです。

ただし「聖書のみ」とは、教会の伝統的教えをすべて否定し、ただ聖書だけを読んでいれば良いということではありません。聖書は解釈されなければならず、そこには正しい解釈と間違った解釈とが出てくるからです。それを判断するために大切なのが教会の歴史の中でまとめられてきた信仰告白や信条というものです。「聖書のみ」とは教会の伝統的教えをすべて否定するものではありません。

それでも、人が考える解釈には間違いが入り込むことがあります。そのような人の解釈に権威を置き、聖書と並ぶ権威を認めてしまうと、人の間違った解釈が力を持つてしまうことがあります。ですから、「聖書のみ」に権威を置かなければならないのです。

神から離れて聖書そのものに権威があるわけではありません。聖書は、神が用いてご自身の御心を示し、救いの御業を成し遂げてくださることにおいて権威を持つのです。

15 節。私たちは聖書を読み、イエス・キリストを知ります。知るだけでなく、イエスがキリスト、救い主であることを信じるように導かれます。聖書は「キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができ」るのです。イエス・キリストを指し示すことばがあり、人を救いに導くことばがあるので、聖書は権威を持っているのです。

そして、パウロも聖書を正しく解釈するために助けとなることがあると言っています。テモテの母はユダヤ人でしたので、彼は幼いころから旧約聖書に親しんできました。それが信仰の土台となりました。また、テモテが周りの信仰者たちや自分自身の信仰生活の中で、「学んで確信したところにとどまって」いるようにと勧められています。そのような助けをいただいて、聖書にしっかり立っているようにと命じているのです。

### 2. 権威の根拠（：16）

ある神学者は、聖書が誤りのない神のことばであると信じる最も重要な理由は、イエス・キリストがそのように認めたからだと言います。

確かに、主イエスは旧約聖書を神のことばとして認めておられました。主イエスは様々な機会に旧約聖書のことばを引用し、そのみことばの権威を認めておられました。また、自ら律法に従われ、律法の正しい意味を教えました。そして、ご自身が成し遂げる救いの御業が旧約聖書の成就であることを意識しておられました。

新約聖書の各書が神のことばであると認めることができたのは、主イエスが使徒たちを任命されたことによります。主は 12 弟子を選び、訓練し、権威を授けました。使徒たちはイエス・キリストの生涯、十字架、よみがえりなどの証人でした。また、主の教えを直接聞き、主の名によって語る権威を与えられ、権威が与えられたことを示す奇蹟を行う力が与えられました。その使徒たちが書いた福音書や手紙などが新約聖書としてまとめられたのです。

ですから、イエス・キリストを信じて救われた者は、キリストが認めた聖書の権威に従うのです。

また、パウロも聖書の権威を認め、「聖書はすべて神の靈感によるもの」と言います。神の息吹によって書かれた神のことばであり、聖書によって神が語っておられます。

「聖書はすべて」とは私たちが持っている旧新約聖書 66 巻のことです。長い期間に多くの著者たちによって書かれてきましたが、不思議なことに互いに矛盾することなく一貫しています。聖書を貫くテーマはキリストによる救いを与えることです。そのように一貫しているのは唯一のまことの神が本当の著者だからです。

そのことを「神の靈感による」と言っています。聖霊の支配があったと言っても、それは著者がロボットのようになって無意識の内に書いたということではありません。神は著者たちそれぞれの個性もその置かれた状況も十分に用いられました。著者たちが神の示していることと信じて誠実に書いたのですが、同時に神がすべてを守り導いて、神の息吹によることばとして書かせたのです。それゆえに、あらゆる間違いから守られ、聖書は誤りのない神のことばなのです。私たちは、聖書によって、神のことばを聞き、みこころを知らせていただけます。聖書は私たちの信仰と人生に権威がある神のことばなのです。その神のことばを私たちはどのように聞いているのでしょうか。

### 3. 信仰と生活に有益（：16～17）

16 節。私たちは聖書から、信仰の内容においても、また信仰者としての生活においても、積極面また消極面の両面の取り扱いを受けます。聖書は、私たちが信じるべき正しい事柄を教え、間違った考えに注意するように戒めます。また、信仰者をふさわしい生き方へと矯正し、神と人の前に正しく生活するように訓練します。

ですから、私たちの教会は、聖書が信仰と生活の唯一絶対の規範であると信じて、告白しています。私たちが分からないことがある時、迷う時には、聖書に聞き、神に教えてくださるよう求めることができます。詩篇の中に、「あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です」（119:105）とあるように、私たちの信仰と生活が聖書によって照らされ、導かれていくことができるのです。

そして、聖書によって信仰と生活が正しく教えられ、整えられていくのは、信仰者が神のみわぎのためにふさわしくなるためです。17 節。ここまで語られたように、聖書によって人がキリストを信じて救いを受け、聖書によって信仰と生活について教えられ、訓練されるのは、神のみこころに従って、人々に仕えるためです。

自分が立派になり、自分が満足するためではありません。神の救いのみわぎのために用いられ、人々の救いのために仕えるのです。その歩みにおいていつも、聖書によって教えられ、整えられていくのです。

ルターは教会から異端とされ、破門されてしまいました。彼が書いた文書が間違っていたことを認めるようにと迫られました。しかしルターは、「聖書の証によって私の誤りを証明され、あるいは明瞭な推論によって、私がそれに訴えた聖書から有罪を宣告され、私の良心が神の言葉によって捕えられない限り、私は何事も取り消すことはできませんし、またそのようにはいたしません。…私は断固としてここに立つものです」と言いました。「我ここに立つ！」が有名です。「神のことば」に立つしかできない、とルターは言ったのです。

私たちも「ただ聖書のみ」に立たなければなりません。聖書を正しく解釈するために、教会の歴史の中で生み出されてきた信条や信仰告白にとどまることが大事です。それでも、聖書のみ権威があることを告白します。聖書のほかに私たちが権威を置いて、大事にしているものが何かあるのでしょうか。それらのものを通してサタンは誘惑してきます。「ただ聖書のみ」に立ちましょう。

イエス・キリストを信じて救われた私たちは、キリストが認めた聖書の権威に従いましょう。聖書によって神がお語りになり、救いの御業をなさることを感謝して、信頼して、みことばに聞き従いましょう。

誤りのない神のことばであり、信仰と生活の唯一絶対の規範である聖書を与えられていることは恵みです。聖書によって信仰と生活が整えられ、みこころにかなない、人々に仕えるようになります。神のことばに堅く立つと決意しましょう。